

聖書箇所：ルカの福音書 11 章 1～4 節

説教題：主が教えてくださる祈り

1 「主の祈り」

さきほど私たちはいっしょに「主の祈り」を祈りました。マタイの福音書 6 章にあるみことばです。今日のところでも、その同じ「主の祈り」のことが話題になっております。

そもそも私たちが「主の祈り」と呼んでいるのは、1 節にあるように弟子たちが「私たちにも祈りを教えてください」と尋ねたとき、主が教えてくださったことに由来しております。

マタイとルカ、二つの主の祈りを比べてみると同じところも多いのですが、全体にルカのほうが短いことに気がつきます。ルカの「主の祈り」は祈りの核心部分がわかるようになっていくとも言えます。

ここに挙げられている主の祈りのすべてを、今日は取り上げることはできません。その中から二つのことを取り上げます。一つは、「父よ。御名があがめられますように。」二つ目は、「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」

2 祈りの要素

(1) 「父よ。」

主の祈りは、「父よ」という呼びかけで始まります。

私が教会に行き始めたとき、祈りの最初に、「父なる神様」と呼びかけるのを聞いて心に引っかかったことを今でも覚えています。というのは、どうしても自分の実の父親を思い

出してしまうからです。父との間に、父が死ぬまでずっとわだかまりを感じておりました。一度も自由に会話をしたことはありませんでした。父の前ではいつも緊張しておりました。父とは、私にとって距離を取っておきたい存在でした。

それが聖書では、神に向かって「父よ」と呼びかけなさいと言うのです。今でも私は「父よ」と呼びかけるとき、小さなうずきのようなものを感じます。

なぜ「父よ」なのでしょう。なぜ「神よ」ではないのでしょうか。昨日の JECA 北海道地区聖会で、遠藤勝信先生がたまたま主の祈りのことにも触れておりました。神は遠くにおられて手の触れられないような存在ではなく、まるで子どもが親に向かって親しみを込めて「お父さん」と呼ぶことができるような存在であることを示している。そのように先生は語っておられました。

私の家のすぐ隣にまだ 3 歳くらいの小さな男の子がいます。ときどき子どもが泣く声が我が家にも聞こえてきます。まだうまくことばをしゃべることはできないはずなのですが、「お父さん」と呼びながら泣いているのが印象的でした。

イエスが私たちは見るとき、私たちは本当に小さな子どものような存在に見えるのかもしれないと思うのです。それは、手のかかるやっかいな子どもという意味ではありません。いつも子どものことを心配し、祈り、心を砕いて子どものために最善のこと

をしたいと願っている親のように、神は私たちに常に関心を寄せているという意味です。

神である方がなぜ私たちに関心を寄せるのでしょうか。この方が私たちを土にちりから、神のかたちに似せて造ってくださり、いのちを与えてくださった方だから。その方を私たちは「父よ」と呼ぶことができる。主はまずそのように教えてくださいました。

(2) 「御名があがめられますように。」

「父よ」の次に、「御名があがめられますように」と続きます。なぜ御名があがめられる必要があるのでしょうか。この方はすべてを造られた神なのだから当然ということでしょうか。もしそれだけだというのなら、ひとりの権力者が好き勝手に自分の国を支配し、国民は批判的なことは何も言えず、ただただ服従している、そんな姿を想像してしまいます。だれもそんな国には住みたくないし、そんな支配者がいて欲しいとは思いません。

父なる神はそんな方でしょうか。違います。では、なぜ「御名があがめられますように」と祈りなさいと言われるのでしょうか。

もし神の御名があがめられなかったならどうなるのか。そう考えてみましょう。私たちを造った方がおろそかにされることになります。私たちを大切に思い、実の父親以上に慈しんでくださる方のことを「知らない」と言うことになります。

その結果どうなるでしょうか。造った方を無視するのですから、当然この方が造られたものも軽んじることになります。極端なことを言えば、足で踏んで汚してもよい、馬鹿にしようが、いじめようが、殴りつけようが、そして殺したとしても良いことになる。

十年以上前のことになりましたが、「なぜ人

を殺してはいけないのか」という子どもからの質問にどう答えたらいいか、話題になったことがあります。単純な質問なのですが、多くの方がどう答えるべきか頭を悩ましていました。いろいろな意見が出ましたが決定打に欠けていました。

なぜでしょう。多くの方が、神の御名をあがめない、そんな世界に生きているからです。神の存在を無視しているからこうなるのです。だから最も単純で最も根本的な質問にうまく答えられないのです。

それがもし、父なる神の御名があがめられたならどうなるでしょうか。この方は私たちにいのちを与えてくださいました。造られた方をあがめるならば、当然その方が造られた私たちのいのちを大切にしなければなりません。そのようにつながっていきます。

聖書は「ただ盲目的にとにかく神をあがめよ」と言っているわけではありません。父なる神があがめられることによって、私たちのいのちの尊さが浮き彫りにもなる。そのように結びついていることを覚えたいと思います。

3 「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」

(1) 「私たちの罪をお赦してください。」

次に4節を考えていきます。

私たちは、あるとき聖書から自分は神に対して罪を犯した者であることを自覚し、救われなければならないあわれな者であることを自覚し、イエスキリストを救い主と信じました。そうやってクリスチャンの歩みがスタートしました。

ところが問題はそれからです。これは誰もが経験することなのですが、クリスチャンと

して歩いていくうちに、それまで気がつかなかった自分の中にある罪に気がつくようになります。救われる前よりもずっと罪に敏感になってしまうのです。そんな自分がつらくなり、中には冗談半分にですが、「クリスチャンにならなければ良かった」と言う方もいます。でも実はクリスチャンとして成熟していくためにだれもが通っていくプロセスです。

私は救われた当初、罪の大きさは手を広げて示すことができる、その程度のものだと思っていました。しかし今は違います。途方もないくらい大きい。どれくらい大きいのか、よくわからない。わからないけれど、闇の向こう側に潜んでいるのを感じます。闇の中から、あるとき思いがけない罪が浮かび上がることがあります。そのたびに祈らされるのです。「私たちの罪をお赦しください。」生涯私たちはこのように祈りながら自分の罪と向き合うこととなります。

(2)「私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」

この祈り、ここで終わりません。続きがあります。「私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」マタイの福音書6章15節には注釈があつて、こう書かれています。

「しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」

どきっとしてしまいます。もし人に罪を私たちが赦さなければ、神は私たちの罪を赦してくれない。そのような意味に感じてしまいます。

でも皆さんいかがでしょうか。私たちのに負い目のある者をみな赦します、と言いながら、実際はどうですか。心から赦していたで

しょうか。正直に言えばこうではないですか。あの人が私にしたあの仕打ちを私は絶対に赦すことができない。そういう思いを心のどこかに抱えたままではないですか。もちろん、頭ではわかっています。あの人の罪を赦さなければ。頭でわかっているけれど、赦すことのできない自分がある。それが現実ではないですか。それでも、神はなんとか努力して人を赦せと言っているのでしょうか。

一つだけ注意しておきます。この箇所について間違った教えがされているのを耳にしたことがありますのであえて触れておきます。この祈りは、たとえ実際に心では赦していなくても、「みな赦します」と口で言えば自動的に赦したことになる、と言っているではありません。主がここで教えようとされていることはまったく別のことです。

皆さん胸に手を当てて考えてください。人の罪を赦せない、そんな自分のことを思い出してうれしいですか。うれしくないでしょう。触れたくありません。自分に負い目のある人たちのことを思い出ただけで怒りがわき起こってきます。そんなことは見たくありません。ふたをしておいて、自分はたいした罪人ではない。そこそこの罪人クラス。そう思っただけで安心したいのです。

だから主はあえて祈るようにと勧めるのです。「私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」この祈りを口にして、後ろめたい気持ちにならない人はいません。真剣に祈ろうとすれば、必ず心に引っかかりを覚えるはずで、赦していない自分を意識してしまいます。赦していないのですから、自分は罪人です。このままでは父なる神から赦していただけない、とんでもないことになる。そんな自分です。

そういう切羽詰まった思いに駆られ、私たちは祈りに追い込まれていきます。「私たちの罪をお赦してください。」

なぜ主が十字架におかかりになる必要があったのでしょうか。主の祈りを通して見えてくることがあります。人を赦せない私たちのために、主は身代わりとなり罪のさばきをお受けになりました。私たちが、ほかの人の罪を赦せないでもんもんと苦しんでいるとき、一方で神は私たちの罪を赦そうとされています。

自分の足もとを見ると、底知れぬ罪の大きさが見えて苦しくなります。でも、私たちは下だけを見るのではなく、上を向くことができます。そこには何が見えるでしょうか。十字架が見えます。私たちのために身代わりとなって罪のさばきを受けてくださる主がおられます。主の十字架を仰ぎ見たとき、主の赦しの大きさに気がつかされていきます。